

# アフガニスタンの教育支援——僻地での初の女子校建設

北原聡子

## ●バダフシヤン州ファイザーバード

タリバーン政権崩壊から数カ月たった二〇〇二年三月、私はワールド・ビジョン・ジャパンからアフガニスタン教育支援チーム（日本の六NGOから二人が参加）の一員としてユニセフ（UNICEF＝国連児童基金）のアフガニスタン事務所に向し、B.T.S. (Back to School Campaign) を担当するため、アフガニスタン最東北州バダフシヤン州都のファイザーバードに赴任した。

B.T.S.は、タリバーン時代に禁止されていた普通教育普及のための全国キャンペーンであり、キャンペーン実施当初、一八〇万人の就学年齢児を対象とした当時のアフガニスタン暫定政権の学校教育推進プロジェクトであった。

九・一一直後にアフガニスタンに勤務する国連の国際職員は国外避難となったため、当時はアフガニスタン内の事務所は主に現地スタッフの指揮の下に機能していたものの、司令塔のアフガニスタン・カントリー事務所はパキスタンのイスラマバードに置

かれていた。

他の国連機関も大抵イスラマバードにアフガニスタン事務所を設置していたため、当時はイスラマバードから直接アフガニスタンの主要都市に国連機関が飛んでいた。

約一週間のイスラマバードでのオリエンテーションの後、私もいよいよファイザーバード入りである。が、私のファイザーバード入りは雪のため、予定よりも一週間も遅れてしまった。ファイザーバード便に搭乗すべく空港で散々待たされた結果の「天候不良のため欠航」のアナウンスに二度もがっかりさせられた後、遂に一週間後にファイザーバードに降り立つことができた。

アフガニスタンでは物事が計画通りに進まないことが多いが、特に冬季の悪天候による頻繁なフライトの欠航には泣かされた。が、このような時アフガニスタン人であれば、「インシヤアッラー」（神のお望みのままに）と言って済ませるのである。

ここで少しバダフシヤンの概要を紹介する。バダフシヤンを聞いたことがなくても、ワハン回廊を耳にしたことがある人はいるだろう。アフガニスタンの盲腸とも呼ばれ

る東北に細長く伸びたワハン回廊とその根元の辺りがバダフシヤン州だ。「中世のような」と同僚が形容したファイザーバードがバダフシヤンの州都である。

パミール高原とヒンドークシユ山脈に挟まれたあたりに位置するバダフシヤンの海拔高度は高く、人々は長く厳しい冬と対峙する。特にタジキスタンと国境を接するワハンを含む数郡は雪のため冬季のアクセスは不可能となり、陸の孤島と化して冬を耐え忍ぶ。

推定人口一〇〇万人弱のバダフシヤンの山岳地帯の人々は、このように厳しい生活を強いられているが、地域によっては農業が営まれ、麦、各種野菜、果物などが栽培される。農作物といえは、バダフシヤンはアフガニスタン有数の芥子（けし）の産地でもある。アフガニスタンの阿片生産は、一国のみで世界市場の需要を満たしてしまいう程の勢いだ、バダフシヤンもその生産高に大きく貢献している。また、幸運を呼ぶ青い石として人気のラピス・ラズリはバダフシヤンの特産である。

バダフシヤンはムジャーヒービディーン時代

## 特集／ターリバーン敗走から6年目のアフガニスタン

の拠点の一つであり、一九九二年にバダフシヤン出身のラッバーニー師がアフガニスタンの大統領に就任すると、その大統領時代にはファイザーバードがアフガニスタンの首都に制定された。タリーバーン時代にはタリーバーンが陥落させることができなかった殆ど唯一の場所であった。

タリーバーン崩壊後の暫定政権は、他部族への配慮があったものの、パシウトウー人寄りであり、タジク人を中心とするバダフシヤンは政策的に優先順位を低くされがちであった。また、東北地方の端っこに位置し、交通の便も悪いため、地理的にも中央から切り離されている。

そんなバダフシヤンではあるが、タリーバーンの影響が及ばなかったため、その時代も普通教育が継続していたのは特筆すべきことである。禁止されていた女子教育もバダフシヤンでは続いていた。そのため、州民の教育に対する理解は他州と比べると高い。

当時は想像もしていなかったが、私はこのバダフシヤンの地で三年近くに渡り教育支援に関わることになる。

## ●アフガニスタンの教育課題

私がアフガニスタンに赴任した二〇〇二年の暫定政府の教育政策は、とにかく学校教育の再開・再建であり、児童の就学率の向上であった。特に児童数増加に焦点が当てられた。国民の教育への理解促進、就学

率の向上、教材と文房具の配布、校舎の修築と建設、教員数の増加などが取り組まれた。同時にカリキュラムの改正、教育省のキャパシティ・ビルディングも進められた。

BTSは予想以上の成果を収め、BTS初年の二〇〇二年は計画を大幅に上回る三〇〇万人以上の児童が通学し始めた。バダフシヤン州教育局などは、受け入れ態勢が整わないため、これ以上のアドボカシー活動はしないと云う程であった。更に毎年五〇万人も増加していく児童に適切な教育を提供する教育の「質」の向上が大きな課題となってきた。

参考までに、タリーバーン時代の推定就学率（一九九九年）は世界最悪レベルの男子三八％、女子三％（UNESCO、EFAレポート）だったものが、二〇〇三年には男子六七％、女子四〇％（ユニセフ、Multiple Indicator Cluster Survey 2003）まで増加している。

現在の政府の教育分野の主な取り組みは、更なる就学率の向上、特に女子教育の推進と地域格差の是正、教員、特に僻地での女性教員の数と質の確保、教育インフラの数と質の確保、数年前から続いている教育課程の整備などである。教育省のキャパシティ・ビルディングも引き続き課題の一つだ。加えて、アフガニスタンには未だに信憑性のある教育データがない。データ収集のシステムとデータベース構築も大きな課題である。

アフガニスタンの教育を推進していく上で大きな問題が治安の問題である。残念ながらアフガニスタンの治安はここ数年悪化の一途にある。

例年冬場は寒さのためかテロ活動が鈍化する傾向があったが、二〇〇六年の冬は自爆テロを含め、反政府活動が増加した。とりわけ、タリーバーン基盤の南部ではテロ活動が激化している。普通教育を認めないタリーバーンや反政府分子は学校をテロの標的とすることも少なくない。

南部を中心に、学校が焼かれ、教師が殺害され、何百という学校が閉鎖に追い込まれている。教員や教育局の職員も反政府分子のテロ対象となるため、誇張ではなく命がけで仕事をしていることを思うと頭が下がる。

比較的教育に理解のあるバダフシヤン州では、今のところ教育に対するテロの脅威は少ない。他の地域と比較して、小学校への女子就学率も良い。バダフシヤンの今後教育課題は、更なる質の向上であろう。

## ●世界一妊産婦死亡率の高いバダフシヤン州ログ郡に初の女子校を

BTS担当中、バダフシヤン州ログ郡は、教育に理解のあるバダフシヤンにおいて、二〇〇三年まで女子児童が全く存在しなかったことが私の目を引いた。そして、もっと驚くべき事実が判明した。



建設中のビビ・マリヤム女子校

二〇〇二年にユニセフと米国疾病予防管理センターが実施したアフガニスタン妊産婦死亡率調査で、調査対象の一つとなったログ郡の数値が驚異的な数字で世界最悪値を示したのだ。アフガニスタンの全国平均死亡率は一〇万人中一六〇〇人で、この数値でさえ世界最悪レベルであるが、ログでは一〇万人中六五〇〇人を記録した。

ログ郡はバダフシヤン州北西部に位置し、推定七万人の人々が約二五〇の村落に生活する。州都ファイザーバードからの距離は約九〇キロだが、野を

越え山を越え川を越えの険しい道なので、道路状態の良い時で車で六時間もかかる。山岳地のため一年の半分、十一月から五月の間は雪で道路が通行不可能となり、外部から遮断される。容易に想像できるとは長く厳しい冬の生産活動は非常に困難となる。夏の間、人々は主に羊、やぎ、牛などの遊牧や農作物生産（主に小麦）で生計をたてるものの十分な収入とはならず、貧困を強いられている。このようなログの地

で、世界最悪の妊産婦死亡率が測定された理由の一つは、医療施設の不在、医療専門家の不在に加えて、明らかに女子教育の不在である。州教育局もそれを認識し、早急な対策を模索していた。

うれしいことに、最初の反応は住民の中から出てきた。女子児童が男子に混じって学校に通い始めたのだ。二〇〇三年三月二一日、ナウ・ルーズと呼ばれるアフガニスタンの新年および新学年度を迎え、ログの四〇〇名余りの女の子が学校に通学し始めた。

しかし州教育局は懸念していた。女子児童が増加しても、このまま男子校で勉強しているのは、三、四年生で退学してしまうだろう。男女が同席して授業を受けられるのはせいぜいその位の年齢までだ。容姿を隠すため一二、三歳頃からブルカをかぶり始めるような風習の中で（タリーバーン後も地方では未だに大多数の女性がブルカを着用している）、学校といえど男女同席がまかり通ることは難しい。また、男女別席の文化は教師と生徒の間でも例外ではない。女子教育を推進していくには女子校建設が急務であった。父兄からも女子校を建設して欲しいとの嘆願が州教育局に届いた。

女子教育への第一歩が踏み出された今、ログへの女子校建設は州教育局の優先懸案事項となっていた。また、バダフシヤンで教育支援に従事する者として、それは私の大きな願いともなった。

バダフシヤンで学校建設プロジェクトを実施していたいくつかのNGOや国連機関などにログでの女子校建設の可能性を打診してみたが、どの団体も、予算の問題や不便な立地などを理由に実施は難しいという。ほってはおけず、「誰もやらないのなら私が何とかしなければ」というバダフシヤンに関わった者の義務感から、ログ初の女子校建設に尽力すべく、任意ボランティア・グループ、チョロネ・プロジェクトを立ち上げた。学校建設自体は州教育局が実施主体となり、チョロネ・プロジェクトは側面から建設資金支援をするという役割分担でログ郡初の女子校建設が始まった（チョロネとは、現地言葉、ダリー語でWomenの意味である。アフガン人は会話の中で頻繁に「チョロネ」と口にする。これは依頼に対する肯定的な返答としてよく用いられる。「ログに女子校を建てよう、女子教育を普及させよう」、「そうしよう」というように、女性の夢を支援したいという思いを込めて名付けられた）。

実際の建設工事は地元NGOが請け負った。州政府の希望により、将来の予想女子児童数を加味して政府の基準をもとに一二教室を備える校舎が設計された。初・中等教育を網羅する女子高校となる。教室に加え、机といす、安全な水を供給する水道施設、手洗い、敷地を囲う塀が併設される。敷地を囲う塀は特に女子校においては、女子児童、生徒が外部男性の目に触れない

女子児童、生徒が外部男性の目に触れない



ログ郡ヤワンの鳥瞰。中央部に横長に見える屋根がビビ・マリヤム女子校

めの大切な部分である。

工事は二〇〇四年の春に着工した。が、当初順調に開始したかに見えたプロジェクトは、早速困難に直面した。プロジェクトの予算は前年の早い時期に見積もられていたが、激しいインフレのため予算を大幅上方修正しなければならなくなった。特に建設資材費や運搬費などがかなりの割合で上昇していた。ログのような道路の整っていない僻地への運搬費は、相当の予算を見積もらなくてはならない。

また、ログ住民が、当初政府に提供した学校建設予定地の変更を訴えてきた。代わりに指定された土地は山の麓で傾斜しており、地盤を水平に均すのに三メートル以上も斜面を削り取るという想定外の仕事（当然想定外の支出も）が加わった。

さらに、夏場は農作業に忙しい人々を工事現場の労働力として確保するのが難しくなり、また労働者の市場価格も著しく上昇した。

この女子校建設はWFP（国連世界食糧計画）のフード・フォー・ワークと呼ばれる労働の対価

としての食糧支給プロジェクトと協力していたが、WFPの食糧在庫状況により、労働者に配布するのに十分な食糧がWFPから得られなかったことが、またしても支出を引き上げた。

ファンドレイジングは、日本政府の草根無償への申請、私の帰国時の講演活動、ホームページやちらしによるPR、バザーへのアフガン民芸品の出展など、友人の協力を得て可能な活動を行った。募金額が工事の進行に追いついていなかったもの、とにかく早く女子児童に勉強できる環境をとの思いから前倒しで工事を実施した（二〇〇七年二月現在、あと一〇〇万円程不足している）。

前述したように、ログへは一年の半分以上はアクセスできず、できて片道六時間以上の場所に位置する。プロジェクト・モニタリングもしくいというのが正直なところである。二〇〇四年当時はWFPで正規の仕事を抱える私自身が個人的にログに行くのはかなり難しい部分があったため、他の国連機関やNGOのスタッフがログに行くとの噂を聞くと、学校の視察と写真撮影をお願いした。

工事の請負業者（現地NGO）は、建設工事一般の腕については信頼が置けるとの噂ではあったが、事務能力については多くの現地NGO同様大きな改善が望まれた。定期報告が滞る、しかも遅れて提出された報告書の内容が不十分であるなど、彼らと

の連絡には忍耐を要した（注：現在は原則としてNGOの建設プロジェクトは法律で禁止されている）。

当初半年で終了する計画であった工事は期間延長となり、長い冬を越すこととなった。最終的にログ郡初の女子校、ビビ・マリヤム校は、予定より一年遅れの二〇〇五年一〇月に完成に辿り着いた。そして二〇〇六年に、約七〇〇名の女子生徒が、新しい校舎で行われる授業を受けるため、元気に登校した。

アフガニスタンでは前述のように予想しなかった問題が次々と発生し、迅速かつ臨機応変な対応が求められることが多い。日本人の感覚で、計画された企画書どおりにプロジェクトを実施するのが当然という常識はここでは通用しない。

実際、二〇〇三年に国連ボランティアとして勤務を始めたWFPの上司からは、物がプラン通りに進まないことの方が当たり前で、問題に直面した際に、その問題ひとつひとつに確実に取り組み解決していくことがプロジェクト・オフィサーの仕事だ、という黄金律を学んだ。

（きたはらとしこ／チヨロネ・プロジェクト代表）

〔付記〕チヨロネ・プロジェクトのホームページは <http://www.coeurcette.jp/dorone>